

2020/01/26

## 「信仰に始まり信仰に進むとは」

「私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。なぜなら、福音のうちには神の義が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。「義人は信仰によって生きる。」と書いてあるとおりです。」（ローマ 1:16-17）

人として正しく生きるとは、信仰の中で生きることです。「信仰」と訳されているギリシヤ語は「ピステイス」といい、相手の心を動かすような誠実な応答を意味します。つまり、信仰とは、「神の呼びかけに対して誠実に応答すること」です。

神の呼びかけに対する最初の応答は、潜在意識の中でなされるため、自分では自覚できません。しかし、潜在意識の中で神との関わりが始まることによって教会に来るようになり、その結果、顕在意識においても神に応答し、神のことばを信じるようになり、自分の救いを自覚するようになります。

「それでは、肉による私たちの先祖アブラハムのばあいは、どうでしょうか。もしアブラハムが行ないによって義と認められたのなら、彼は誇ることができます。しかし、神の御前では、そうではありません。聖書は何と言っていますか。「それでアブラハムは神を信じた。それが彼の義とみなされた。」とあります。」（ローマ 4:1-3）

神が義（正しい）とするのは信仰です。人は行いによってその人が正しいかどうかを判断しますが、神は行いではなく、イエス様のことばを信じるかどうかという、信仰によって判断します。

長い間子どもがなかったアブラハムに、神が「あなたの子孫は海辺の砂のように数えきれなくなる」と約束した時、アブラハムはそれを信じました。神はこれによって彼を正しいと認めたのです。これが信仰です。

「働く者のばあいに、その報酬は恵みでなくて、当然支払うべきものとみなされます。何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。」（ローマ 4:4-5）

この世界は報酬の世界ですが、神はそうではありません。何の行いもなく、ただ信じる者を義としてくださるのが神です。神が私たちに求めているのは、信じることだけなのです。

「それでは、この幸いは、割礼のある者にだけ与えられるのでしょうか。それとも、割礼のない者にも与えられるのでしょうか。私たちは、「アブラハムには、その信仰が義とみなされた。」と言っていますが、どのようにして、その信仰が義とみなされたのでしょうか。割礼を受けてからでしょうか。まだ割礼を受けていないときででしょうか。割礼を受けてからではなく、割礼を受けていないときにです。」

(ローマ 4:9-10)

「割礼」とは、行いの代名詞です。アブラハムの時代にはまだ律法がなく、最も重要な行いと言われていた割礼をしていませんでした。それなのに、義とされたのは、行いではなく信仰こそが神の立てた永遠の契約だからです。

「彼は、割礼を受けていないとき信仰によって義と認められたことの証印として、割礼というしるしを受けたのです。それは、彼が、割礼を受けないままで信じて義と認められるすべての人の父となり、また割礼のある者の父となるためです。すなわち、割礼を受けているだけではなく、私たちの父アブラハムが無割礼のときに持った信仰の足跡に従って歩む者の父となるためです。というのは、世界の相続人となるという約束が、アブラハムに、あるいはまた、その子孫に与えられたのは、律法によってではなく、信仰の義によったからです。もし律法による者が相続人であるとするなら、信仰はむなしくなり、約束は無効になってしまいます。」(ローマ 4:11-14)

アブラハムは行いによって義と認められたのではなく、義とされたことで行いがついてきたのです。

## ■なぜ行いではなく信仰なのか

それは、次のように書いてあるとおりです。

「義人はいない。ひとりもない。悟りのある人はいない。神を求める人はいない。すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行なう人はいない。ひとりもない。」(ローマ 3:10-12)

なぜ神は信仰を義とされるのか、それは行いで救われる人はいないからです。

神は永遠ですが、私たちが暮らしているこの世界は有限です。ですから、この世界でどんな良い行いを積み上げようとも、すべて滅んでしまい、何も残りません。有限の世界は、神とは無縁の世界ですから、人の側からどんな努力をしても、神を求めることも神に近づくこともできないのです。それが、善を行なう者も神を求める者もなく、行いは無益になったということです。

そこで神が用意した福音は、神の側から私たちに手をのばしてくださり、その手をつかむならば、神が引き上げてくださるという福音です。神が呼びかけ、その呼びかけに応答する

者を神が引き上げてくださることで、神に近づくことができます。神の呼びかけに応答した後も、神のことばを信じ続けることで、神が引き上げ続けてくださり、ますます神に近づくことができます。これが、信仰に始まり、信仰に進むということです。

イエス様は、自分の力では救われることができない私たちを、病人と呼びました。そして「あなたがたは皆医者助けなしには助からない病人だが、わたしのところに来るなら助かる。」と言って、すべての人を招いておられます。これが神と私たちの関係の基本です。

## ■律法は救いのためにあるのではない

「律法は怒りを招くものであり、律法のないところには違反もありません。」

(ローマ 4:15)

このことばの意味は、20世紀になって、心理学が発展し、心の仕組みが解明されて、ようやく理解できるようになりました。

なぜ人は怒るのでしょうか。それは相手が腹の立つことをしたからです。その時、人は皆、悪いのは相手だと思っています。なぜでしょうか。それは、自分の中にある「ねばならない」という律法に、相手が反しているからです。

誰の心の中にも、幼い頃から、多くの律法が形成され続けています。子どもは親に愛されたいと思っていますから、親の期待がそのまま律法になります。成長すれば、社会から期待されていることがそのまま「〇〇すべきだ」という律法になります。

そして、その律法によって人を判断し、律法を実行している人は良い人・正しい人であり、違反する人を見ると腹が立つようになっているのです。

私たちが何かを怒りを覚えるのは、すべて自分の中にある律法によるものと聖書は教えています。これは本当に近年になってわかってきたことですが、聖書はそれを2000年前に教えているのです。

人に腹を立てるのは、相手が悪いからではなく、自分の律法の問題であるということは、律法を変えれば、相手に対する思いも変わるということです。

また、私たちは、その律法の行いをもって、自分を義としようとしています。これがこの世界のありようですが、神はそれを否定するのです。

律法は怒りを招くだけですから、怒りから解放されるためには、律法を修正しなければなりません。イエス・キリストが来たのは、律法を終わらせるためだと聖書は教えています。そのために、神は信仰による救いを私たちに提示なさったのです。

「そのようなわけで、世界の相続人となることは、信仰によるのです。それは、恵みによるためであり、こうして約束がすべての子孫に、すなわち、律法を持っている人々にだけでなく、アブラハムの信仰にならう人々にも保証されるためなのです。」

(ローマ 4:16)

## ■さらに進化した義

「彼は望みえないときに望みを抱いて信じました。それは、「あなたの子孫はこのようになる。」と言われていたとおりに、彼があらゆる国の人々の父となるためでした。アブラハムは、およそ百歳になって、自分のからだが生んだのも同然であることと、サラの胎の死んでいることとを認めても、その信仰は弱りませんでした。彼は、不信仰によって神の約束を疑うようなことをせず、反対に、信仰がますます強くなって、神に栄光を帰し、神には約束されたことを成就する力があることを堅く信じました。だからこそ、それが彼の義とみなされたのです。」（ローマ 4:18-22）

アブラハムは、海辺の砂の数ほど子孫が生まれると言われ、「はい、信じます」と言ったことで、義とされました。しかし、なかなか子どもが生まれないことを不安に思い、まず彼は、女奴隷によって子どもをもうけます。これは一種の養子縁組のようなものですが、神はそうではなく、すでに老人である妻のサラから子どもが生まれると言われました。

多くのクリスチャンが、大枠では神のことばを信じると言いますが、具体的な物事を目の前にすると、だんだん弱気になってしまうものです。アブラハムもそうでしたが、再び神の約束を示され、もう動くことはしませんでした。普通ならあり得ないことであっても、神の約束だから信じることに徹したのです。これが、彼の義とされました。

この義はさらに進化した義です。自分から動くのではなく、神を信頼することによって、義がどんどん成長し、心に安らぎが訪れるようになるのです。

## ■信仰とはそもそも何か

### 1. 神との平和を持っている

「ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。」（ローマ 5:1）

神の平和は永遠の平和です。神の呼びかけに応答したら、もう責められたり裁かれたりすることはなく、滅ぼされることもありません。イエス・キリストを信じる人は皆、この平和を持っています。これが永遠のいのちです。

### 2. 神の栄光を望んで大いに喜ぶ

「またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいきます。」（ローマ 5:2）

神の栄光を望んで大いに喜ぶとは、キリストとの平和の中にあることを、感謝して生きることです。

### 3. 患難を喜ぶようになる

「そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。」（ローマ 5:3-5）

患難さえも喜ぶことができるようになるのは、患難に対して神の約束があるからです。神は私たちに、どんな時も「恐れるな。大丈夫、必ず助けるから。」と励まし続けておられます。そのことばを信じることができれば、それは希望を生み出します。これが信仰に始まり、信仰に進むということです。この信仰によって生きるなら、どんな患難に遭っても最終的には希望を持つことができるのです。

しかし、神が助けると約束していることを知っていても、私たちはなかなか信じられません。ですから、祈るのです。信じられないから、信じられるように助けてくださいと祈るのです。このように、どこまでも神にすがるのが、義人の生きかたです。

#### ■アブラハムのその後

アブラハムはその後も応答し続け、ついにイサクが生まれます。ところが、神はそのイサクをいけにえ捧げよとアブラハムにお命じになりました。アブラハムにとってイサクは、長い間祈り続け、待ち続けた宝です。しかし、アブラハムは神のことばに従います。なぜ従うことができたのでしょうか。

「信仰によって、アブラハムは、試みられたときイサクをささげました。彼は約束を与えられていましたが、自分のただひとりの子をささげたのです。神はアブラハムに対して、「イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる。」と言われたのですが、彼は、神には人を死者の中からよみがえらせることもできる、と考えました。それで彼は、死者の中からイサクを取り戻したのです。これは型です。」（ヘブル 11:17-19）

イサクをいけにえにするために、アブラハムがイサクにナイフを突き立てようとしたその時、神はアブラハムを止めました。アブラハムがここまで実行することができたのは、神の約束を信じていたからです。神は、イサクを通して数えきれないほどの子孫が生れて繁栄すると言われました。だからアブラハムは、イサクが成長して子どもが生まれると信じていました。たとえ自分が彼をいけにえに捧げても、神の約束が変わることはないと思っていたので、神に従うことができたのです。

神は、その信仰を見て、アブラハムがイサクを殺すのを止めました。イサクを捧げるという行いが立派だったからではありません。どんな状況でも神の約束を信じたことが義とされたのです。

「ああ愚かな人よ。あなたは行ないのない信仰がむなしいことを知りたいと思いますか。私たちの父アブラハムは、その子イサクを祭壇にささげたとき、行ないによって義と認められたではありませんか。あなたの見ているとおり、彼の信仰は彼の行ないとともに働いたのであり、信仰は行ないによって全うされ、そして、「アブラハムは神を信じ、その信仰が彼の義とみなされた。」という聖書のことばが実現し、彼は神の友と呼ばれたのです。人は行ないによって義と認められるのであって、信仰だけによるのではないことがわかるでしょう。」(ヤコブ 2:20-24)

人は、本当に信じることができれば、困難に立ち向かうという行いを実行することができます。アブラハムは、信仰によって前に進みました。

これが、神が私たちと築きたい関係です。どこまでも神を信頼して行動する真の信頼関係を築きたいのです。これが義人の生きかたです。神は私たちが奴隷にしたいのではありません。縦の関係ではなく、横の関係で、共に生きるために人を造ったのです。

本当に信じるなら、行いが伴うことを教えています。勇気をもって一步を踏み出すことが、信仰に進むことです。困難に出会ったら、神の約束を信じて踏み出しましょう。神は必ず助けると約束しておられます。神が求めているのは、神のことばに本当に耳を傾け信じる者です。そうすれば、そこに大きな希望を見出すことができるでしょう。